

赤い小枝：オランムチル

★内モンゴルが果たす役割★

内モンゴルという語は、地域を指す一方で、民族名の「モンゴル族」とも重なり合う。実際、内モンゴル（自治区）ではモンゴル族は全人口の一割余りにすぎず、漢化が著しく進む。にもかかわらず、オリジナルなモンゴル族文化を名乗る現象が頻出する。このギャップを内包する内モンゴルを語る際に、118万平方キロの物理的空間や2470万人住民の実在だけではなく、「無限に広がる大草原に少数民族の代表格モンゴル族の遊牧民が暮らしている」というイメージの存在にも留意する必要がある。

内モンゴルイメージを生成させてきたのは、今のモンゴル族というより、むしろ彼らを包摂する国家であろう。国家と民族の利害が折衝して生まれた結果が、「民族区域自治」という制度だ。そこでは、国家からの民族の分離独立は認められない一方、諸民族の文化的主体性が強調される。こうした文化的主体性の供給源の一つが、内モンゴルである。内モンゴルは国家にとって、政治的には模範的な自治区、民族的には模範的な少数民族を演じ、「国民統合」のための役割を果たしてきた。

内モンゴルが果たす社会的な役割はこれだけではない。内モ

ンゴルは中国モンゴル族の民族範疇の基準点になった。とりわけ、自治区から遠く離れた西北地域に暮らすモンゴル族にとつての内モンゴルは、プラス評価に満ちた存在であり、民族振興の資源にもなる。内モンゴルの文化要素は、モンゴル族文化それ自体として、人々の社会的文化的な特徴づけに深く関与し、いわば「民族統合」のためにも役割を果たす。その果たす役割の特徴から見て、オラロンムチルは、まさに、内モンゴルの代名詞となっている。

モンゴル語で「赤い小枝」を意味するオラロンムチルは、1957年、内モンゴル北部で誕生した芸能団体の名称である。小枝の色は緑が多いが、あえて「赤い」という語を用いたのは、社会主義の象徴だからだろう。けれども、社会主義建設のための運動体であると同時に、オラロンムチルは、多くのモンゴル人にとつて、「マナイ（我々の）オラロンムチル」と親しく呼ばれてきた身近な存在となり、モンゴル族文化の象徴にもなった。

オラロンムチルは、交通が不便な牧畜地域のモンゴル族牧畜民たちの単調な生活に娯楽を提供するという目的で設立された。オラロンムチルの特徴は、少人数の組織構成で機動性に優れた点にある。隊員は、牧畜民の集落に赴き、モンゴル語話者の彼らに親しみやすい表現を用いて、民族的・地域的な特色ある芸能を披露したり、党や政府の政策を宣伝したり、科学知識を伝えたり、時に写真撮影、理髪、図書購入、器械修理、病氣治療なども行なったりしていた。

まさに、機動性ゆえに、つねに第一線で民衆のために奉仕できるという特徴が、やがて国家の指導層に注目された。1960年代「オラロンムチルという火を全国に燃え広がせよう」とする当時の総理周恩来の指示を受けて、オラロンムチルは全国巡回を行なった。1965年5月から行なわれた巡

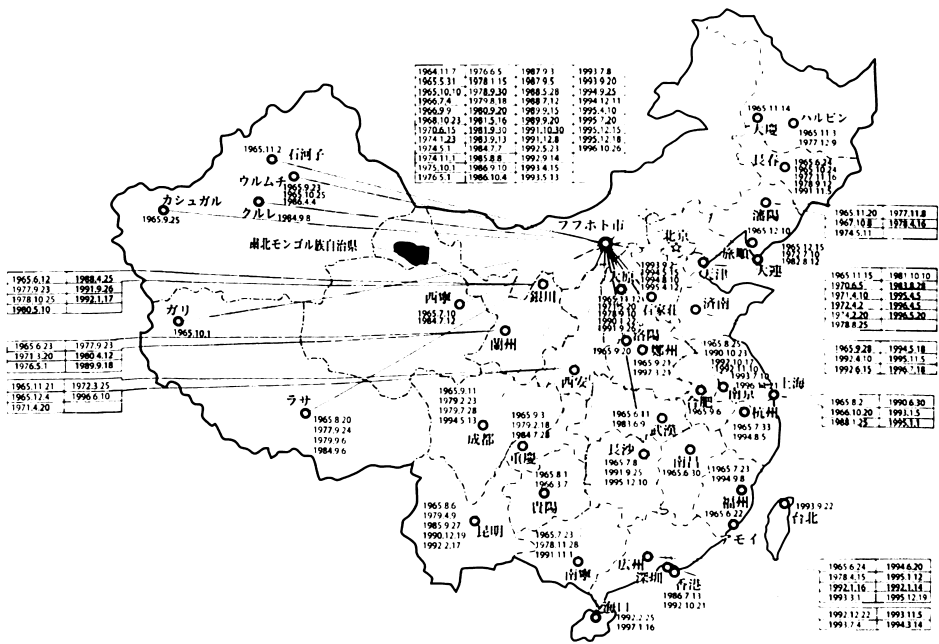


図 中国国内における内モンゴル自治区オランムチルの巡回公演図
 出典：内蒙古自治区文化庁編『烏蘭牧騎之路——記念烏蘭牧騎建立四十周年 1957-1997』（内蒙古人民出版社、1997年）を基に筆者作成

回公演は、延べ時間7カ月半、移動距離5万キロメートル、出演回数600回、観客動員数が百万人という記録を残した(図)。活動がマスメディアに報道され、全国的なオランムチル学習ブームが引き起こされた。漢族地域を含む全国各地に、「オランムチル式の○○」と称する芸能団体が現れ、オランムチルはもはや説明されるべき固有名詞ではなく、一般的で誰もが知っている普通名詞として使用されるようになった。

市場経済の時代に入ってから、一時的に低迷したものの、オランムチルは国や地方の指導者の支持を得てきた。鄧小平は「オランムチルの作風を発揚し、全身全霊人民のために奉仕する」(1983年)、江沢民は「オランムチルは社会主義の文芸領域における旗印」(1997年)との揮毫を贈った。1987年、内モンゴル文化庁の主導の下、「内モンゴルオランムチル

チル学会」というオランムチル事業の維持・推進を目指す団体が設立された。2003年、オランムチル学会で自治区の共産党副書記長は、「内モンゴルはオランムチルを著名な文化ブランドに育てていくべし」と題する講演で、オランムチルの潜在的なブランド価値を掘り起こし、内モンゴルの文化の代表的な銘柄に育ていかなければならぬと力説した。時代を問わずオランムチルは社会主義中国にとって欠かせない存在だった。このことは、オランムチルは内モンゴルが果たすべき「国民統合」の役割の一翼を担っていることを物語る。この意味で、赤い小枝が果たした役割は、巨樹なものだった。

他方、内モンゴル自治区外部に分布するモンゴル諸地域においても、「××地域のオランムチル」と称する芸能団体が続々と生まれた。オランムチルを介して内モンゴルから楽器や舞踊などモンゴル族の伝統文化とされるものが数多く導入され、地域の民族文化を構成する重要な要素となる。甘肅しゅうくほく北モンゴル族自治県（図）のケースはその好例である。

歴史的にはチベットの影響を強く受け、言語文化的に「チベット化」し、そして近代においてはカザフの侵攻を受け、住民がシルクロード各地に離散していくなど、共同体の崩壊を経験した自治区の人たちにとって、民族文化の再建が不可欠となっていた。1950年に設立した自治県は、1966年5月から自治県のオランムチルを結成しようとしたものの、文化大革命の勃発のため挫折した。忍耐強い努力の末、1974年その願いが叶った。自治県オランムチルの元リーダーJ氏によれば、同年4月、彼が牧畜民の若者を10人集め、当時の全国模範オランムチルとされる内モンゴル自治区のオトク旗オランムチルに赴き、歌、踊り、音楽、声楽などの基礎訓練を受け、11月故郷に戻

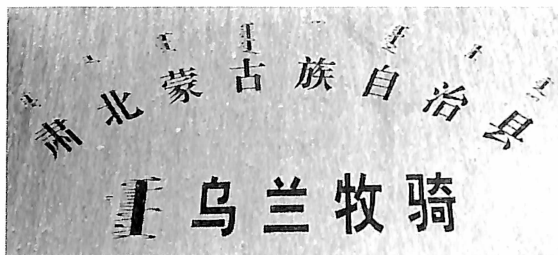


写真1 甘肃省肃北モンゴル族自治州オランムチルの看板（2013年）

り、自治県オランムチルが創設された。創設を支援すべく、オトク旗オランムチルは、隊員9人を自治県に派遣し、自治県オランムチルに編入させた（写真1）。

J氏は、オランムチル導入前後に見られた地域社会の変化について次のように述べる。「オランムチルが誕生するまで、肃北地方の民謡は多くあったが、内モンゴルのそれとは全く違っていた」。オランムチルの登場によって内モンゴルの歌、従って、一般に知られるモンゴル族の歌が多く表れた。現在、自治県で流行っている民族舞踊も内モンゴルから導入したもので、元々自治県には舞踊（ブジク）という概念すらなかった。民族楽器と言われる馬頭琴も、オランムチルが誕生してから初めて自治県に現れた。牧畜民の間に馬頭琴を普及させたのは、自治県オランムチルのメンバーで内モンゴル出身のE氏であった。E氏によれば、彼が来るまで、自治県の牧畜民は馬頭琴に関する知識をほとんど持ち合わせておらず、馬頭琴の音を耳にしたことのある人も少なかったと言う。

1974年末に生まれた自治県オランムチルは、翌年から正式に牧畜地域などでの公演活動を始めた。その後の十年間、公演回数は617回、移動距離は2万6000キロメートル、観客数は延べ25万人だった。長い間、自治県オランムチルは、専門知識を強化すべく、内モンゴルの関連機関に多くの隊員を送り続けてきた。とくに近年、地域の経済状況が好転するに伴い、文化振興の一環として自治県オランムチルの規



写真2 農耕地帯で公演する自治県オラーンムチル（オヨンバト〔鄔永巴圖〕撮影、2015年）

模拡大が要請され、演奏のみならず自治県における馬頭琴の生産も本格的に始まった（写真2）。

モンゴル族人口が僅か三千人程度の自治県は、中国モンゴル族文化の発信地の一つとなりつつある。オラーンムチルは、馬頭琴などいわばオリジナルなモンゴル族文化とされるものを地域に取り入れ、内モンゴル、そしてその背後にあるモンゴル文化に直接アクセスすることを可能にし、彼らの民族文化の破損を修復する装置となった。自治県の事例からオラーンムチルは、内モンゴルを基準とした中国モンゴル族的な共通項の確立に寄与したことが分かる。「民族統合」の意味でも赤い小枝が果たした役割は巨樹なみだった。

このように、内モンゴルで誕生したオラーンムチルは、一方では、社会主義を掲げる近代国家のあり方に深く規定され、そのために存続しているが、他方では、モンゴル族というカテゴリーに内実を与え、モンゴル族カテゴリーの参照によって同一性を保っている。内モンゴルのイメージを形にし、新たな社会的現実を創り出すオラーンムチルが果たすこうした役割は、内モンゴルそのものにも言えよう。両者は別次元のものであるが、そうであるがゆえに、オラーンムチルは内モンゴルを表出する記号であり続けるだろう。（シンジルト）



内モンゴルを知るための

60章

ボルジギン・ブレンサイン (編著)
赤坂恒明 (編集協力)

明石書店



内モンゴル

を知るための

ボルジギン・ブレンサイン (編著)
赤坂恒明 (編集協力)

60章

明石書店





9784750342238



1920336020000

ISBN978-4-7503-4223-8

C0336 ¥2000E

定価▶本体2,000円+税



章

を知るための

内モンゴル



135

ボルジギン・ブレンサイン (編著)
赤坂恒明 (編集協力)

